後鳥羽院在隠岐詠歌伝説の構造

呉羽長

承久三（一二一二）年五月、北条義時追討の院宣を発し討幕の兵を挙げた後鳥羽上皇は、官軍方の敗戦により乱後幕府の冷酷な処置を蒙ることとなった。七月七日院政を廃され翌日出家、更に隠岐国への遷幸を強いられる。十三日京都を発した院は二十七日出雲国美保関到着、此地で随伴してきた侍・女官・医師らを残して、便船にて八月四日隠岐国に到った。時に院四十二歳、以後十九年にわたる在島の後、帰京の思いかなわぬまま延応元（一二三九）年二月二十七日六十歳で同地に崩じた。その流竄を『吾妻鏡』は次のように記している。(1)

○（七月）十三日乙未。上皇自二鳥羽行宮一遷二御隠岐国一。甲冑勇士囲二御輿前後一。御共女房両三輩。内蔵頭清範入道也。但彼入道。自二路次一俄被二召返一之間。施薬院使長成入道。左衛門尉能茂入道等。追令二参上一云々。（中略）

○廿七日庚戌。上皇着二御于出雲国大浜湊一。於二此所一迂二座御船一。御共勇士等給レ暇。大略以皈洛。付二彼便風一。被レ献二御歌於七条院幷修明門院等一云云。

タラチメノ消ヤラテマツ露ノ身ヲ風ヨリサキニイカテトハマシ

シルラメヤ憂メヲミヲノ浦千鳥嶋々(2)シホル袖ノケシキヲ（中略）

○（八月）五日丙辰。上皇遂着二御隠岐国阿摩郡苅田郷一。仙宮者改二翠帳紅閨於柴扉桑門一。所者亦雲海沉々而不レ弁二南北一者。無レ得二雁書青鳥之便一。烟波漫々而迷二東西一之故也。不レ知銀兎赤烏之行度。只離宮之悲。城外之恨。増悩二叡念一。御許也云云。（新訂増補国史大系所収本に拠る）

隠岐島前ではその行在所があった中ノ島を中心に後鳥羽院をめぐる伝説がこの地固有の伝承としておこなわれている。およそ後鳥羽院の隠岐来島伝説は、都側での院の配流に関る悲劇的話が史実に基いてなされているのに依拠し附随する形で伝えられている。その都側の物語性をもった配流譚は、島内の伝承をみても判然としないが、「我こそは新島守よ」の歌を伝えていることから『承久記』『増鏡』などが考えられよう。都のこの上なく高貴で風雅な人が不幸にも隠岐に流されこの地で没するという非日常的話を島の人々は自分達と関らせ、その伝説をつくった。それは都側でおこなわれた伝説（院の怨霊譚など）(3)とは全く無縁である。本稿は、この隠岐における後鳥羽院伝説を考察しその特質を明らかにしよ

島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第二十巻　二五～三八頁　昭和六十一年十二月

うとするものである。その場合、院をめぐる伝説は、院と和歌の繋がりの深さを反映して院が詠んだとされる歌を多くとりこめていることに気づく。その点に着目し、以下院の詠歌をめぐる伝承を検討し、そのしくみ及び成立の事情などを考え、他の院をめぐる隠岐の語りを勘案しながらこれらの特質を論じていくことにする。

一

およそ、ある人物をめぐる伝説は、その人物とゆかりあるもの（詠歌・遺品・その人物と関る土地など）を核としてそれを説明するという形で非日常性をとりこめ奇瑞譚・悲話などとして話の筋が形成され、それが個々の語りの場の状況・要請に応じて可動的に語り出されるのであるが、現在おこなわれている後鳥羽院在隠岐伝説[4]の場合、その核となる話柄は近世期に採録された話のそれがそのまま生かされているといえる。近世において島側の後鳥羽院をめぐる話を採録した文献・資料としては、

○『隠州視聴合紀』（斎藤勘介著、寛文七（一六六七）[5]）
○『増補隠州記』（松岡長政著か、貞享二（一六八五）[6]）
○『おき濃すさひ』（日置肥富著、宝永二（一七〇五）[7]）
○『隠岐国風土記』（尾関意仙著、元文元（一七三六）[8]）
○『隠岐諸色年代略記』（三沢喜右衛門著、宝暦一一（一七六一）[9]）
○『隠岐古記集』（大西教保著、文政六（一八二三）[10]）
○『隠州風土記』（村尾茂郷著、天保四（一八三三）[11]）
○『隠島巡狩録』上巻中の「承久仙陵紀」（景山脩著、文久三（一八六三）[12]）
○『隠岐見聞誌』（著者・成立年不詳[13]）

などがあげられるがこれらの中で後鳥羽院の在島詠歌伝説を網羅的に記述している『増補隠州記』の中の該当記事を左に掲出する。

一後鳥羽院ノ御陵　（中略）後鳥羽院ハ、承久三ノ乱に、武臣北条義時か為に被捕させ給ひ、七月八日鳥羽にて御餝りを落シ給ひ、同十三日鳥羽出御、同廿七日出雲三保関に着御、此処より御舟ニ被召、京より御供奉ノ人々ハ大形御暇被為下、御母后七条院、女院修明門院へ御歌を被献と云々

たらちめの消やらでまつ露の身を風より先にいかてとわまし
しるらめや憂目を三保の浦千鳥鳴く々々しほる袖のけしきを

八月五日、隠岐国阿摩郡苅田郷ニ着御ありしと云々、承久より十九年ノ後、延応元年亥ノ二月御宝算六十ニシテ終に御崩御、同廿六日勝田ノ寺ニ葬リ奉ル、此君三保関より隠岐国江御渡海之節

我こそは新島守よ隠岐の海のあらき浪風心して吹け

如斯被遊けれハ、波瀾暴風しつまりしとぞ、夜ニ入月没シて湊もさすかに遠かりけれハ、入津無覚束思召焼火権現ニ御祈誓在りしに、崎村ノ湊に神火立て、無恙御着船ましましけると、云伝、此時の御製に

灘ならば藻しほたくやとおもふへし何をたく藻の煙なるらん

其夜ハ崎村の美保の社ニ御一宿御製に

命あれハかやか軒端の月もみつしらぬは人の行末のそら

其翌日、焼火山江御社参在しに、鳥居迄権現寺僧と現し御迎ニ出給ふ、僧ノ曰、船中ノ御製に、何を焼藻の煙なるらんと被遊候を何を焼火の煙なるらんと御直しあれとあり、上皇、是ハ此山ノ権現なり

と、叡慮在テ、それ迄ハ大山権現ト申せしか、御改焼火権現と被成寺ハ雲上寺ト云寺号を被下弘法大師ノ作之薬師仏を御寄進被遊と也、干今雲上寺ニ在、勝田山源福寺ニ御殿を建、是に十九年の星霜送せ御座、蛙の声、松風ノ音を聞召、侘て、

蛙なく勝田の池の夕たたみ聞ましものハ松風の音

それより勝田池に蛙ありて、今も鳴事なし、松風の音も吟敷なかりしとなり、又源福寺の寺家ニ堤坊と云在り、此僧被召出、当寺ノ来歴御尋ありしに、止事なき王威に恐れ、更に勅答なし、其時の御狂歌に

とへとさらにかつたの寺のいはれをもかくして胸につつみ坊かな

勝田山の梅の盛を御覧して

思ひ出る都の春にかはらしな勝田の山の花のさかりは

なき人の御忌日とて、僧をめされし時、御追歌、

思ひ出て折焼柴の夕けふりむせふもうれしわすれ形身に

五月雨降りつゝき、賤か手わさを御覧ありて、

賤の女かかたすき麦をほし侘てにうにやすらん五月雨の比

海士町松尾山金光寺へ御登山被為成、東西南北の海御覧ありテ、

しつの女か横なしはたを立置てまた見るも海また見るも海

此外法皇之被遊たる隠岐百首とて在

一黒木之御所と云て、（中略）元弘弐年、後醍醐天皇、北条高時か為ニ被捕当国江左遷在けるに、（中略）後此黒木村御所ニ遷ラセ奉ルと云伝也、当初ニ郭公在テ鳴事なし、所のものに、御勅問いたしけれは、勅答ニ曰、後鳥羽院此所へ御幸有しに、郭公しきりに鳴けれハ、上皇御製に、

なけハ聞き聞てはむかしのこひしきに此里出よ山郭公

とあそはされたる故に、其後郭公終に鳴事なしと申上ル、此時、後醍醐天皇

聞人も今はなき世に郭公たれにおそれて鳴かぬ此里

如此御製有けれハ、それゟ又鳴由也

前に私は後鳥羽院の隠岐来島伝説は都側での院の配流に関する悲話（『増鏡』「新島守」・『承久記』など）が史実に基いてなされているのに依拠して伝えられていると述べたが、そうした悲話が出典の原型を残さぬほど島側にひきつけられて院をめぐる話としてふくらまされ伝承されていたものを島の記録として書き記す際、その伝承は再び都側の史実・記録の援用を蒙ることになる。右の『増補隠州記』の文章でも、後鳥羽院の隠岐来島までの経緯は、本論冒頭に掲げた『吾妻鏡』の文章に負うところが多い。[14]『隠州風土記』『隠岐古記集』なども院の来島までの経緯を述べるのに『吾妻鏡』の影響をうけている。伝承を筆記する際のこうした操作は考察の際配慮を要する。ただし『増補隠州記』の場合、ひととおり後鳥羽院隠岐着御及び崩御までを述べてからは（「此君三保関より隠岐国江御渡海之節」以降）、そうした操作は認められない。

『増補隠州記』では後鳥羽院御陵・黒木御所を説明する形で院の隠岐での話が集成されており、隠岐の院をめぐる伝説中の和歌がほとんど収められている。[15]しかし当初より後鳥羽院の隠岐の話が右のように一つの（もしくは黒木御所をめぐる話を別して二つの）まとまりをもっていたということではない。『隠岐古記集』『隠州風土記』は『増補隠州記』と同様、後鳥羽院の事跡を歌物語風に語る形態をもつが、これらにしても隠岐の地蹟を語る多項目の中の後鳥羽院御陵の解説という一項にすぎな

い。（独立話として隠岐での後鳥羽院のありようを綴るものは「承久仙陵紀」のみ。）『隠州視聴合紀』『隠岐見聞誌』などは後鳥羽院にちなむ話が島前の各々の地区の項に分けて採られており、地縁性は無視できないところであり、このことから考えてはじめは後鳥羽院に関する話が、各々の地区に根ざすものとして散在し、地区ごとの項において採取され掲出されたものと思われる。ちなみに前掲『増補隠州記』に他の和歌とともに入れられた「命あれば」の歌は、崎の「三保大明神」の項に

　此社ハ承久三ノ秋、後鳥羽上皇左遷之御旅行三夜を明させ給ひし、茅カ檐端ノ御製ハ、此拝殿成ルべし、古樹高生し、神さびて見ゆ

と重ねて言及されている。こうした各地区の後鳥羽院との関りを語る小話が、後鳥羽院御陵の解説のところに吸収されて院の隠岐配流の物語という独立性をもった話となるのである。そうした集成に力を与ったのは院の詠歌として伝承された歌であった。御陵を守る源福寺では後述のように後鳥羽院の詠歌を多く伝えており、悲劇的流離をモチーフとしてそれらを語り出す際に、同様の悲哀の情を詠み込んだ他の後鳥羽院詠歌をめぐる語りが地縁性を弱くしてそこにひき入れられ、物語的にふくらませられて院行在所としての同寺を押し出すものになったのである。

　ただしそうした吸収は歌を含んだ語りに限られる。後鳥羽院が崎へ上陸した際の伝承の中で、上陸後渡海の疲れで院が腰をおろした腰かけ石をめぐる話や、崎から尾根づたい源福寺へ向かう途上雨が降ってきて院は松の下で雨宿りしたがその地を「天ケ谷」「天ケ峰」と呼ぶようになったという伝えなどはその地を離れて語れないものであり、その地区ごとに伝承されている。

　後鳥羽院の和歌をめぐる伝説がそうした地区ごとの和歌伝承の集成とすると、それらは

(1)崎への上陸をめぐる伝承
(2)上陸時の焼火山との交渉をめぐる伝承
(3)行在所源福寺における伝承
(4)別府黒木御所での後鳥羽院と後醍醐天皇のほととぎすをめぐる詠歌の奇瑞の伝承

に分けることができる。以下各々の成り立ちについて検討していく。

二

後鳥羽院の崎上陸譚は現在次のような形で伝えられている。

　後鳥羽上皇は、日にちなんかは覚えていませんけど、沖あいでしけにあわれたんですけんな。そいで、

　我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け

という御歌を詠まれてね、そろそろ浪が静まって。で、崎の灘へ着かれてね。そして今度、灘にこしかけの岩ちゅうのが今でもあっですがね。そこで一泊せられたわけです。で、宿を頼んだけど、誰も、おそれおおい言うて、宿をしてあげる人がなくてね、神社でそのお泊りになられた。一夜をあかされたです。神社のその、拝殿ちゅうのが茅葺でね、昔の、それがもう、あすここと、痛んどってね、で

　命あれば茅家の隈の月も見じ

で、非常にこのように歎かわれてね、こういうあばら屋でね、そのすごされねばならんがちゅう、悲惨なくらいですわね。

そいで、そこから今度、山を越して、隠岐神社、今の御陵のところへおいでになられた、あそこは、げんぷく寺ちゅう真言宗のお寺だったんですだ。で、そこで今度十四日に清掃、私はまあ行きますが。どんなふうになるやら。

（以下略）（島根大学昔話研究会編『隠岐島前民話集』昭五二・三、話者は明三五生の男）

右の語りの中で「命あれば茅家の隈の月も見じ」は前掲『増補隠州記』中の「命あれハかやか軒端の月もみつ云云」の歌がこのように伝えられたものであろう。こうした語りが古くからおこなわれて『増補隠州記』などに歌を中心に採られたものと思われるが、「我こそは」「命あれば」の両歌は各々『遠島百首』雑部（93・99、この歌番号は続群書類従所収本の歌の配列に拠る）に載せられている。（「命あれば」の歌は初句「限あれば」として入集。）このうち「我こそは」の歌は『承久記』『増鏡』にもあり、ともに行在所に着いてから間もない折の詠出としているが、隠岐の伝承としてはほとんどが出雲美保関から隠岐へ渡る折の詠出とする。はじめて隠岐へ向かう際の歌としてその詠出が劇的に捉えられて語られているのである。命令口調によってつくられる独特な悲壮さ故に後鳥羽院の隠岐流竄の愁嘆を象徴するものになっている。（この歌については次節でも検討する。）

また「命あれば」の歌で「かやが軒端の月」を伝承の中では破れた茅ぶきの屋根から月の光が漏れてきたものと解して、後鳥羽院をそうした粗末な神社の拝殿に宿らせざるをえない島民のおそれ多さの思いを伝えている。この拝殿はこうした故事をもつ故に何度ふきかえても雨漏りがなおらないという言い伝えもある（野津龍氏『隠岐島の伝説』）。初句を「かぎりあれば」としたこの歌は『遠島百首』第一類本・第二類本（田村柳壱氏の分類[16]による。一類から五類までの順で作品改訂の経過を示す。）にはなく、第三類本の宮内庁書陵部蔵『遠嶋百首　後鳥羽院』（貞清親王筆）では秋歌としてあり、他の第三類本（上田市立図書館花月文庫蔵『後鳥羽院遠嶋百首』）及び第四類・第五類本では雑部に入っている。このことから考えてこの『遠島百首』（第一類本）が成立した折にはまだつくられていなかったと思われるが、それを上陸当夜の院の詠とするのは、院の宿所の粗末なさまを院自身が嘆いたものとしてあらわすのにこの歌が適していたからであろう。こうして後鳥羽院の崎上陸の話は、遠流の悲惨という形で島民がうけとめたために、その心情を語るのに遠島における孤愁・苦悩・思郷の感懐をとりこめた歌を集めた『遠島百首』中の歌を掬いとってそれを語りの核として伝承されることになったのである。『増鏡』「新島守」は『遠島百首』から間接的に影響をうけてつくられたといわれるが[17]、あるいは「我こそは」の歌は『増鏡』もしくは『承久記』などに採られてその悲嘆を主題的に高揚された段階で、口碑とむすびついたとも考えられる。

三

『増補隠州記』その他にみえる後鳥羽院詠で前述の「我こそは」の歌とともに渡海の途次に詠まれたとされる「灘ならば藻しほやくやとおもふへし何をたく藻の煙なるらん」の歌をめぐる話は「焼火山縁起」中の焼火山の権現と院の交渉の話を起源とすると思われる。この縁起は『隠州視聴合紀』『隠岐見聞誌』に収載されている。その記録を誤記の少な

い『隠岐見聞誌』より翻刻して掲げる。

承久年中後鳥羽院狩レ干レ斯也日即暮矣暴風起囲瀾高仍詠曰朕古曽波
新嶋守与隠岐埜海乃荒機浪風心志而吹 於レ是風浪漸収然 而夜闌月昏
宮船不レ知レ所レ之漂二泊於中一流風波又欲レ起
帝心念レ天時一火在レ雲一間其余暉昭レ海黄即得レ便扈従奉賀王奇レ之詠
曰灘奈羅波藻塩屋久野土可レ憶何遠焼毛濃煙奈類蘭而後到レ其一津有レ
漁一翁蹲レ磯一上勅曰是何浦翁対曰隠州干振郡波止村也
帝有レ歌一名今夜海上之製何為然乎王勃然問レ其一故翁対曰焼藻則何疑
只謂焼一火則可也 王問レ其一姓一名対曰 臣在レ茲者尚矣誓護レ海一船言終
不レ見王為立レ祠以二空海所レ刻之 薬師仏安レ之号 山云レ焼一火扉レ寺云レ
雲一上蓋焼火在レ雲一上之義也

右の文章は、後鳥羽院が隠岐渡航の途次嵐にあって漂流した際「我こそは」の歌を詠んで波浪をしずめ、更に暗夜入津の便を失っている際神火に導かれることを得て「灘ならば」の歌を詠んで西ノ島の波止に到り、上陸後大山権現と逢い「灘ならば」の歌の「何をたくもの」を「何をたく火の」に変えるべきことを示されたというもので、歌を詠み入れての焼火山・波止をめぐる地名起源譚の形を成している。この縁起で注目されるのは後鳥羽院像に他の伝承におけるような悲愁はみられず、帝王としての威厳・高貴さ・格の大きさが印象づけられている点である。それは前節でも掲げた「我こそは」の歌に内包される「確たる自覚と宣言的語調」「堂々たる命令的強さ」（小原幹雄氏『遠島御百首注釈』昭五八・四、隠岐神社社務所）に負うところが大きい。この歌について丸谷才一氏は

われこそはと云ふ肝要なり。家隆卿隠岐国へ参り、十日ばかりありて帰らんとし給ふに、海風吹き帰りがたければ、我こそ新じま守となりて有れ共、など科なき家隆を波風心して都へかへされぬとあそばしける。されば俄に風しづまりて家隆卿都へ帰られしとなり。

という『後鳥羽院御百首』に付された古注[18]を引かれて、

しかしわたしの言いたいのは、後鳥羽院が沖の海の浪風に「我こそは」と呼びかけるとき、それはみじめな流人として、しかも自分のため、哀願しているのでは決してなく、この島を守る者として、誰か他人のため、海に命令しているのだということである。その誰かとは荒天のため舟を出せずに当惑している漁師であると考えてもいいわけで、「新じま守」という言葉には、案外、つい先日まで支配していた日本の国全体の広さにくらぶれば、こんな小島を司るくらいはすこぶる易しいという自負がこめられているかもしれない。どうやら新任の島守は、今までの者とは格段に違う手ごわい相手だよと海をおどしているように見受けられる。（日本詩人選『後鳥羽院』昭四八・六）

と解釈されているが、このように悲しみとはうらはらの、威を伴う気宇の大きさは見逃せないところであろう。『遠島百首』に詠み込まれ、『増鏡』『承久記』に採られた高い調子のこの歌が、帝王の威を示すものとして島民の間に膾炙されていたことは推定できるが、それが焼火山の地名を詠み入れた民謡風の「灘ならば」の歌と結びつけられ、後鳥羽院と焼火山の関りを物語るものとしてその山（権現・神社）の権威づけをおこなうことになったのである。右の『焼火山縁起』の中で翁が「誓護海船」と奏するところ、後鳥羽院を島に導いたことを機縁として以後付近を航行する船の安全を保証する趣意が込められており、漁師船頭が海上

に迷った際の導きという象徴的意味をこの故事から読みとることができる。例えば『隠岐国風土記』にこの焼火神社について

一、神社ニハ、後鳥羽帝之遷幸の節勅号之地焼火山雲上寺。是ハ船頭之洋中に漂泊し暗夜なとニ迷、湊を失たる時祈候へハ、神火あらわれ安穏を得候よし。

とあり、そうした事情を証し出している。こうして焼火山は後鳥羽院来島という伝承を得て島民の信仰を集めることになる。[19] 焼火山をめぐる後鳥羽院伝説が、他の地区の伝承と異なり院の流されの悲哀を表へ出さないのは右のような成立の経緯をもつからであろう。

なお後鳥羽院の隠岐上陸譚として前節の崎での話と本節の話が併行しておこなわれていることは問題である。各々が交渉をもたずに別個に伝承されている限りはさしさわりはないが、それらが個々の口承のレベルから後鳥羽院をめぐる話の集成がおこなわれてつき合わされたとき齟齬を生じる。その場合両者は各々他を排するのではなく時間的操作によって調和的に集成されている。つまり崎には腰かけ石や美保神社仮寓の厳然たる上陸をめぐる話がおこなわれており、その信頼度の強さによって焼火山をめぐる波止上陸譚はそれに抵触することはできず、一旦崎へ上陸した後日を経ての巡行（『増補隠州記』は「翌日」）として両上陸譚を調和的に扱っている。これは「焼火山縁起」に「而後」とあるのを解釈に幅をもたせて日を経ての波止上陸としたわけである。ただし「承久仙陵紀」は焼火山と後鳥羽院の交渉を住民の口碑として信をおかず、院をめぐる他の詠歌伝説と区別している。このことはこの焼火山縁起を核とする話が他の後鳥羽院伝説と異質であることを示してもいる。

四

行在所源福寺（院御陵）をめぐる伝承の歌としては、前に掲げた『増補隠州記』収載歌のうちの、

○蛙なく勝田の池の夕たたみ聞ましものハ松風の音
○とへとさらにかつたの寺のいはれをもかくして胸につつみ坊かな
○思ひ出る都の春にかはらしな勝田の山の花のさかりは
○思ひ出て折焼柴の夕けふりむせふもうれしわすれ形身に
○賤の女かかたすき麦をほし侘てにうにやすらん五月雨の比
○しつの女か横なしはたを立置てまた見るも海また見るも海

の六首が考えられる。ただしこれらが同一の伝承を経てきたとはいいがたい。『おき濃すさひ』では隠岐での後鳥羽院御製で『遠島百首』にもれた歌として右六首及び「なけハ聞き」の歌（『増補隠州記』収載、前掲。次節で検討）をあげ、これらの歌を解説するが、「蛙なく」の歌については、「此御歌の妙にて蛙声を発せず春は只うこつくのみと今の源福寺主快長法印の語らる」とある。寺方でこの寺域内の池についての故事を語り伝え、名所として提示していることがうかがえる。「とへとさらに」の歌も同様であろう。寺の由来を知らぬ寺僧をからかうということで寺と後鳥羽院の繋がりを強調するものになっている。これら二首は各々の歌を含んだ話のおもしろさに興味の対象があり、詠まれた内容も単純で口承的であるのに対し、他の四首は多分に鄙的な素材を詠み入れているとはいうものの深い憂愁の感懐をうたって歌としての完成度の高いものといえる。（「賤の女かかたすき麦を」の歌で「にうにやすらん」は筆写

の際の誤りであろう。[20]）四首のうち「思ひ出る都の春に」の歌は都の春の優美な景にも匹敵する勝田山の桜の美しさを讃えたものであるが、主想としては思郷の悲哀を詠むもので歌そのものに興味の対象があり、「蛙なく」の歌や「とへとさらに」の歌とは同レベルの歌ではあるまい。なお、「思ひ出て折焼柴の」の歌はすでに『新古今和歌集』巻第八「哀傷歌」に、

十月ばかり、みなせに侍りしころ、前大僧上慈円のもとへ、ぬれてしぐれのなど申しつかはして、つぎのとしの神無月に、無常の歌あまたよみてつかはし侍りし中に　太上天皇

801 おもひいづるをりたくしばの夕煙むせぶもうれしわすれがたみに[21]

（『新編国歌大観　勅撰集編』所収）

と入集している。「おもひ いづる」「をりたくしば」「わすれがたみ」などのことばにより鄙における懐郷の情を詠んだ秀逸歌としてうけとられ、『遠島百首』に載せられていないことから、寺方固有の伝承の歌として他の源福寺伝承歌の中にとりこまれたものであろう。思うにこれら四首の歌は、うたわれた抒情の質からも『遠島百首』と繋がるものがあり、いわば「遠島百首補遺」として寺方に伝えられていたものではなかったか。およそ源福寺は『増鏡』「新島守」に、

このおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入て、山かげにかたそへて、大きやかなる巌のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、気色ばかり事そぎたり。まことに、「しばの庵のたゞしばし」と、かりそめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしくゆへづきて しなさせ給へり。（日本古典文学大系所収）

と描かれる後鳥羽院行在所を寺内に設けたところであり、御陵を守る寺であった。この源福寺が近世期、松江藩・京都御所などで後鳥羽院を偲ぶ気運がもり上がる中で脚光を浴びているさまが諸記録によってうかがえる。例えば『隠岐諸色年代略記』には、

一同（寛永）九年午夏、御仙洞様ゟ後鳥羽院御弔ニ被成御勅命、水無瀬中納言氏成郷（ママ）、三保関ゟ当国知夫里浦江御着船、直ニ海士村、源福寺江御着船被成而、其後橋浦に渡り、焼火山江御社参、夫より三保関江御出船ゟ、同年迄百三十年ニ成、

一後鳥羽院御陵、明暦四戌春、出雲国主松平出羽守直政公、改而御造立ノ初ゟ、同年迄百六年ニ成、延宝二年寅春、又松平出羽守様御修覆有而ゟ、同年迄八拾八年ニ成ル、享保十九寅春、松平出羽守再造立被成候ゟ、同年迄弐拾九年ニ成ル、（以下略）

などと記され、また『増補隠州記』（前に掲出した「後鳥羽院 御陵」の項の部分の直前）には、

天和弐戌ノ夏、源福寺ノ住僧上京して、六月廿二日水無瀬殿へ参ルに、折節御（ママ）鳥羽院ノ上皇御忌日とて、歌の会有しに、源福寺ノ来ルを各々満座感悦在て、水無瀬殿御親子殊に満悦し給ひ、古氏成渡海を前書にして、和歌一首宛氏信、兼豊ゟ恵賜也、二枚共ニ表軸を調へ、是又寺之什物トス、

とある。特に天和二年の記事は中央の後鳥羽院を偲ぶ歌会との繋がりという点で注目されよう。こうした趨勢の中で源福寺は後鳥羽院との関りを示す歌などを寺固有のものとして提示する必要性が高まっており、「思ひ出て折焼柴の」の『新古今和歌集』入集歌を含めて院の詠歌といわれる歌を整理し、後鳥羽院の悲劇的流離譚の核をなすものとして伝承す

ることになったものと思われる。

そしてこれら歌集的色彩の強い歌伝説と前述「蛙なく」の歌及び「とへとさらに」の歌をめぐる歌語りが一つに集められて、隠岐の諸事を報告・紹介する諸文献に採録される際、源福寺の伝承歌として記録されることになった。そして他の地区の後鳥羽院にちなむ伝承歌も、ここに吸収され、いわば院の配流の歌物語という形でまとめられたのである。

五

西ノ島の別府黒木御所における「なけハ聞き聞てはむかしのこひしきに此里出よ山郭公」の後鳥羽院の歌をめぐる伝承話は、後鳥羽院の歌に応じて啼くことをやめていたほととぎすが、後醍醐天皇の来島の折帝の歌（「聞く人も今はなき世に郭公たれにおそれて鳴かぬ此里」）によって再び啼くようになったというもので、後鳥羽院の詠歌にこめられた威徳に対応する後醍醐天皇の詠歌のそれを奇瑞によって示すものである。(22)

二首の歌のうち後鳥羽院の歌は、配流の悲しみを助長する小動物のなき声のかしましさを止める形で詠まれたもので、前述源福寺勝田池の蛙に向かって「蛙なく」の歌を詠んだ奇瑞譚と同じ発想のものである。この勝田池をめぐる院の詠歌譚にならって黒木御所御幸の詠歌奇瑞譚がつくられ、さらにその不思議なほととぎすの沈黙を破らせ啼き声を旧に戻した後醍醐天皇の威徳をたたえる物語としている。黒木御所という場所柄からいっても主役は後醍醐天皇であり、純粋に後鳥羽院に焦点をあてた詠歌伝説とはいいがたく、『増補隠州記』で他の院の詠歌伝説から独立している点(23)故なしとはしないが、配流の悲嘆を根底にして、歌詠みとして高名な院の詠歌に込められた不可思議な力への島民の思いがこうした説話形成の基盤にあることは注目されるところである。

なお「承久仙陵紀」ではこの話をさして、

又、子規の御製あれども故ありて、元弘行宮紀に付き見す

と記し、『隠岐見聞誌』「郡村部」巻四でも「元弘行宮紀事」の書名をあげているが、この記録は見ることができなかった。「元弘行宮紀（事）」なるものが、前述波止上陸譚における「焼火山縁起」のように、別府黒木における当該二首をめぐる話の起源をなす文書である可能性も考えられるところである。

また『おき濃すさひ』『隠岐古記集』では後鳥羽院の「なけハ聞き」の歌を源福寺で詠んだものとし、院のこの歌でほととぎすが啼くのをやめた地域を島前、もしくは隠岐島全体としている。それが別府黒木へ来島した後醍醐天皇により拘束を解かれ啼き声が旧にもどったという話になるのだが、こうした話の変改は、当初別府黒木御所をめぐる詠歌伝説が源福寺の伝承歌群に吸収されるとき、寺側に容易にとりこめられるようなされたものであろう。

六

以上隠岐島前におこなわれる後鳥羽院詠歌をめぐる伝説を四分類し各々の成り立ち等について論じてきた。これらの歌が島側及び都側の文献に収載されるありようは次表のとおりである。

これによって後鳥羽院の隠岐をめぐる伝説が、来島までの経緯を都側の資料によって支え（その際「我こそは」の歌を来島の折の詠に変えて

	焼火山縁起	隠州視聴合紀	おき濃すさひ	隠岐古記集	隠州風土記	承久仙陵紀	吾妻鏡	承久記	増鏡	遠島百首	その他
たらちめの					○	○	○	○	○		六代勝事記・最勝四天王院御障子
しるらめや					○	○	○	○			六代勝事記・最勝四天王院御障子
我こそは	○		○	○	○	○		○	○	○	
灘ならば	○		○	○	○	○					
命あれは			○	○	○	○（初句限あれば）				○（初句限あれば）	最勝四天王院御障子（初句限あれば）
蛙なく		○	○	○	○	○					
とへとさらに			○	○	○	○					
思ひ出る			○	○	○	○					
思ひ出て			○		○	○					新古今集巻八・後鳥羽院御集雑
賤の女かかたすき麦を			○	○	○	○					
しつの女か横なしはたを			○	○	○	○					注(24)
なけは聞き			○	○	○						

さえいる)、島内での院をめぐる話をほぼ島固有の伝承によって形成しているさまを捉えることができよう。

表中『承久記』は古活字本(慈光寺本には「たらちめの」「しるらめや」両歌が載らない)に拠り、『遠島百首』は続群書類従本に拠った。[25]

またこれらの歌のほか『隠岐古記集』では、『遠島百首』収載の、

- 浪間わけ隠岐のみなとに入るふねの我こそ恋るたへぬ思ひに(雑・77)
- 野辺そむる雁のなみたは色もなし物思ふ露のおきの里には(秋・48)
- 三保の浦を月と供にそ出し身のひとりそのこる隠岐の外山に(雑・92)
- 兎に角につらきはおきのしまつとりうきはおのれか名にや答へむ(雑・83)

及び『雲陽志』収載の

- 思ひやれ憂目を三保のうらかせになく〳〵しほる袖のしつくを(島根郡下)

という歌をとり入れて物語をふくらませ、更に次のような後鳥羽院以外の歌人の歌を院の詠歌として掲げている。

- 千早振出雲の杜に身はすへてねきそかけつる紅葉ちらすな、(『永久百首』563[26]仲実)
- はるかなる幾代の雲になれぬらん出雲の宮のちきのかたそき(『拾玉集』「百首歌」4528)
- しらま弓出雲のやまの常盤なる命かあやな恋つゝあら(ママ)(『家持集』316、ほかに近似した歌として『万葉集』巻第十一2448、『夫木和歌抄』巻第二十8127・8153)
- 篝火のところ定す見えけるは流れつゝみのたけはなり堯(『拾遺和歌集』巻第七「物名」紀輔時)
- 楸生るをきの小嶋の波のうへに浦風さそふひくらしの声(『千五百番歌合』巻第七・四六二番 左保秀朝臣、『夫木和歌抄』巻第九「納涼」3635)

こうした歌のとり入れは後鳥羽院詠歌伝説の拡大の方向を示すものといえる。つまり一方では院以外の歌人の和歌をとり入れて名所歌風に文雅の性格を増幅し、一方では『遠島百首』から配流の嘆きの大きい歌を掬いとって院の島での悲哀を強調しているのである。こうした拡大は単に『隠岐古記集』作者の恣意的操作としてすますわけにはいかない。こうした拡大を促すものが院の詠歌伝説に本来的に内包していると考えるべきではないか。流竄の「あはれ」は波止上陸譚を除いて院の伝承話にみられるものであり、源福寺に伝わる一連の詠歌(「蛙なく」「とへとさらに」の両歌を除く)は日常性から離れた詩的世界を保っている。こうした伝説の性格づけに大きく力を与ったのは『遠島百首』であったろう。この、来島間もなく編まれてその時点の院の悲傷・愁嘆の肉声をとりこめた百首歌は都側の記録からは比較的自由であるはずの院の島での姿を悲哀の方向へ収斂させていった。それには歌の伝承が寺僧など知的な層次によったということが与るがそれはある意味では島での後鳥羽院像の拡充の制約ともいえる。『遠島百首』的な嘆きを伝承の中で強調することは、後鳥羽院の本来の生きる場が都であることを示し、島民は距離をおいて院の孤立した悲しみを見守るという形を保つことになる。そこに院の在島の詠歌の超俗性が相乗する。島の人々の後鳥羽院に関る姿は、本来来島するはずのない至上の尊貴の人が流されて島へ到ったその悲し

みを、「気の毒」として奉仕することに終始する。午突きの起源の話や村上助九郎の奉仕の話はその好例であろう。また後鳥羽院の崎上陸に関して次のような話が伝わっている。

後鳥羽上皇が、おいでになった時に、腰かけの岩っていうがあっでしょう。崎村というところに。その、こう、お着きになった時に雨露をしのんで腰をかけられて、そいで初めて隠岐へ、海士においでになった時に、腰かけの岩。その時にその上に椿の木かなんか、木があってね、そこに鶏がとまっておってね、そいで、糞をたれたそうだ。そいで崎というところは、今でも鶏を飼わない所だ。（隠岐・島前民話集』、話者は明三六生の男）

語りの後半の鶏の粗相の話は前述美保神社の拝殿の雨漏りのたえない話と同様悲愁を負う尊貴の人後鳥羽院を現実感をもって仰ぎみる島民の姿勢の象徴と捉えられる。

こうした後鳥羽院のあり方は、平安時代初期小野篁が隠岐に来島し、一年半の間に幾体かの仏像を刻み島の娘との間に子を成し、再び島を離れることによって島民の祖霊的存在として信仰の対象となっているという融和性[27]と対照をなすものである。それには法皇という位が島民との隔りを決定しているということのほかに、都側の配流に到るまでの記録・物語が院の像を固定化していたこと、そして今までのべてきた『遠島百首』的世界の伝説への浸透などの要因が考えられる。

ただしそうした後鳥羽院伝説の中にあって焼火権現との交渉をめぐる波止上陸譚は異質な光彩を発する。「我こそは」の歌の嘆きの命令調が帝王の格の大きさとして捉えられた結果である。歌語りを継承する人々の層次の違いも考えられるところであるが、そこには篁が仏に優位する超越者像を獲得したような人物像の拡大の可能性をみることができるのである。

明治二年、廃仏毀釈により伝承の母体たる源福寺が焼亡した。同寺における伝承はもっぱら記載され固定したところでの話として残されることになり、それが他の地区における口承の後鳥羽院伝説と補完しながら現在に至っている。その間、港湾設備の充実・航海技術の向上による焼火山信仰のうすれ、時代時代の天皇観のゆれなどにより後鳥羽院をめぐる伝説も微妙な振幅をもって継承されているといえる。[28]

（1）このほか後鳥羽院配流の記録は、『愚管抄』二、『六代勝事記』『承久記』下、『増鏡』「新島守」などに詳しい。

（2）この部分、吉川子爵家所蔵本・島津公爵家所蔵本には「なく〳〵」とある。

（3）龍粛氏『鎌倉時代　下』（昭三一・一二、春秋社）所収「承久の変の遺響」及び松林靖明氏「この世の妄念にかかはられて――後鳥羽院の怨霊――」（『帝塚山短期大学紀要――人文・社会科学編――』第十八号、昭五六・一）参照。

（4）現在おこなわれている後鳥羽院在隠岐伝説を記載した文献・資料として以下のものをあげることができる。

- 須田主殿氏「隠岐の聖蹟に就て」（『島根評論』第十二巻第八号、昭一〇・八）
- 宮田隆弘氏「隠岐に於ける後鳥羽天皇」（同右）
- 近藤泰成氏『隠岐・流人の島』（昭三六・一一、いづみ書房）
- 横山弥四郎氏『隠岐の伝説』（昭四一・五、島根出版文化協会）
- 野津龍氏『隠岐島の伝説』（昭五二・七、鳥取大学教育学部国文学第二研究室）
- 島根大学昔話研究会編『隠岐・島前民話集』（昭五二・三）

（5）『隠岐島史料近世編』所収。
（6）『新修島根県史資料篇』2近世上巻所収。
（7）（5）に同じ。
（8）『島前の文化財』昭五四・一一所収。
（9）（6）に同じ。
（10）島根大学附属図書館所蔵。
（11）『島前の文化財』昭五六・一二所収。
（12）『島根評論』第十二巻第八号、昭一〇・八所収。
（13）島根県立図書館所蔵。
（14）「武臣」「御餝りを落シ給ひ」などのことば及び「たらちめの」「しるらめや」の歌の配列など。
（15）野津龍氏『隠岐島の伝説』ではこれらの歌のほか、後鳥羽院が金光寺山に登った際の詠歌として

いざさらばここを都と定むべし松尾の山のあらん限りは

を紹介している。この歌は野津龍氏の著書にのみみえるもので伝承の経路等判明せず今回は考察の対象としなかった。後日を期したい。

また『隠岐古記集』のみに載る他の歌人の歌で院御製に擬せられた歌や『遠島百首』より引いた歌については後述する。

（16）「『遠島百首』伝本考」（『語文』第五十七輯、昭五八・五）、「『遠島百首』の伝本と成立――作品改訂の問題を中心として――」（『国語と国文学』昭五八・六）
（17）木藤才蔵氏「増鏡における後鳥羽院」（『和歌文学の世界』第三集、昭五〇・三、笠間書院）
（18）『後鳥羽院御百首抄 遠嶋』（井上宗雄氏・田村柳壱氏編『中世百首歌二』古典文庫）の注にも

新嶋守とはあたらしき嶋守の事也嶋にまします処に家隆都より嶋へまいられける程へてたち帰らんとせられけれは我をこそ新嶋守にとめをくにあらき浪風心して吹てかりうを急かへせと云こゝろをよめる也

とある。こうした注解は、「承久記」に、院が隠岐の行宮に到着してからの記述として

海水岸ヲ洗ヒ、大風木ヲワタル事、尤烈シカリケレハ、
我コソハ新島モリヨ澳ノ海ノアラキナミカセ心シテフケ
都ニ家隆卿伝承リテ、後ノ便宜ニ、
ネサメシテキカヌヲ聞テ悲キハアラ磯浪ノ暁ノ声

とあるのをとりちがえ、「我こそは」の歌を、来島した家隆が島から帰京する際の院の詠としたことによる誤りと考えられる。

（19）現在おこなわれている後鳥羽院波止上陸譚を『隠岐・島前民話集』より掲出する。

焼火という名前はね、あの、今、海士にね、後鳥羽天皇、あの天皇さんが、ここの沖にくちがありますが。はいり口が。あの口から入って来られたらしい。その時にその、焼火山は、現在は神社だけれども、その当時は地蔵権現言うてお寺だったんだ。あったらしいです。明治維新までは。その明治維新、まだずっと前ですから、だからまあ、地蔵権現って言うそのお寺があったんじゃないでしょうかね。そん時にその、あの、そのあかだの口んなっとうね。そこの真沖のあの入り口は。で、そっから入られてね、お入りになられて、その火が見えたらしい。山のね。そん時にその後鳥羽天皇が歌を作られた。それはね、

「ただならぬやくやもしおと思うべしなにを焼火の煙立つらん」

というその歌を作られたわけです。それでその、焼火という名前を付けたという伝説があるということを、まあ、聞いてます。

それで、ぼくに言わしたらね、ここにある鳥居さんは、その宮司さんのまあおっしゃるには、その口から入って、ここへまあおいでになったわけだね。舟で。そん時にその、非常に浪が高くてね、その、この陸に上がることが不可能だったらしい。それでそん時にその、歌を詠まれたと言うことだけど、その歌はまあ、はっきりわかりません。それでその、歌詠まれて、そのまあ、その、波が止まって、そいでこの波止というとこは、この波、止まるということになっておる言うま

あ、伝説があるという事はまあ聞いてます。ですから、それがほんとうでしたらその、後鳥羽上皇は、ここの、この浜へ上がられたんで今ここに鳥居が立っているんだなあと、まあ、判断してまんのやけどね。まあ、そういう古い事はその、はっきりはわからん。（話者は明三五生の男）

（20）『おき濃すさひ』ではこの句について

にうとはそも何の事そととへは此境の人もしらす書く者にうに雀とのそむ時は稲室に雀をなす麦をも室になして干（ほし）置事侍れば麦のにう共いふへきにやいふかし

と解するが、院がこの地の者にも解しかねる訛りを歌に詠み入れたとは思われず、やはり書承の際の誤写と考えるべきであろう。

（21）『新古今和歌集』は慈円の返しとして次（802）に

おもひいづるをりたく柴ときくからにたぐひしられぬ夕煙かな

の歌を載せている。

（22）『増鏡』「久米のさら山」では元弘二（一三三二）年隠岐へ流された後醍醐天皇が後鳥羽院の住まいの跡で院を偲ぶさまが次のように描かれている。

かの島におはしまし著きぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人のすみかも稀に、をのづから海士の塩やく里ばかり遙かにて、いとあはれなるを御覧ずるにも、御身の上はさしをかれて、まづかのいにしへの事思し出づ。かゝる所に世をつくしけん御心のうち、いかばかりなりけんと、あはれにかたじけなく思さるゝにも、今はた、さらにかくさすらへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ、かの御心の末や果たし遂ぐると思ひしゆへ也。苔の下にもあはれと思さるらんかしと、かき集めつきせずなん。

（23）『おき濃すさひ』『隠岐古記集』でこの贈答は他の後鳥羽院の詠歌とともに一括されて伝説を形成している。ただし後者の場合後醍醐天皇の詠歌を欠く。

（24）この歌について『おき濃すさひ』では次のような付言をしている。

讃州の俗談には崇徳院播州室津に日和待をさせ給ひし時、賤が女がぬきなきおさをたて置てけふもうみうみあすもうみうみとよませ給ふといひ伝ふ

（25）田村柳壱氏注（16）では第四類本に位置する。

（26）『新編国歌大観』の歌番号による。以下同じ。

（27）拙稿「隠岐の小野篁伝説考」（『山陰文化研究紀要』第二十四号、昭五九・三）参照。

（28）なお本稿では触れえなかった後鳥羽院御番鍛冶をめぐる伝承の考察については、佐藤寒山（貫一）氏に『後鳥羽院番鍛冶考』（昭四九・七、後鳥羽院番鍛冶顕彰委員会発行）がある。

（島根大学教育学部国語研究室）